

私達の科の、育ての親でいらつしやつた生江先生が、昨年の七月におなくなりになりました。先生の輝かしい御生涯、ろうろうとした御隣叢の中から、私達は、それぞれいろいろなものを学びました。ここに、先生についての想い出を記し、つつしんで、哀悼の念をささけたいと思います。

22 回 生

花 田 歌

生江先生は社会事業界の生字引のような方であつた。そのことを充分に思つていながら、ある日、欧米旅行から帰朝の大槻さんに、生江先生には私たち何を教つたのといつたものである。「あされた人、社会事業概論よ」と大笑いされた。

三十数年前のことだし、戦争のショックが壁になつたりして、概論と的確にいえなかつたことを大槻さんによつてはつきり思い出した。教壇でいつも同じ調子で淡々とその著書を読まれたお姿を互に思い出し語り合つ

生江先生を
偲んで

たりした。友のたれかれは就職のお世話もよくして下さつたという。常に慈父のような清水のような感じの先生であつた。

24 回 生

吉 田 ま す み

(聖路加国際病院
社会事業部主任)

生江先生の思い出を書くようにと菅先生からの御連絡がありました。さて改つて先生の思い出を書くとなるとこれといつて特別面白いお話しも浮かびません。

何といつても先生からお講義を聴いたのが最早三十何年前のことですから、どんな内容であつたか思い出すのさえ困難な程古い話で

す。でもお話の中にニュージーランドは社会保障制度が完備されているので貧乏も犯罪もなく国民のすべては毎日安心して暮しているというようなことを伺い、若かつた私はニュージーランドに行つて住みたいと考えたことを記憶しています。きつと先生のお講義はすばらしく名講義だつたのでしよう。

次に先生は何十年たつても少しもお変りないという感じでした。そのような私の感じはきつと始めてお会いした時の先生がすでに五十二・三才でいらした筈ですから、当時の私には御年輩の先生という印象を受けましたので、それ以後は私だけがどんどん年をとりますのに先生はほんとうに少しもお変りなく昔のままのように感じました。

私は先生と特別親しい関係はありませんで

したので他の方々のように特記出来るようなものはありません。

ただ仕事の関係で卒業後も度々色々の会合の場でお目にかかる位でありました。

先生はお忙しく又色々と重い役についていられるので先生には唯御挨拶を申上げて引き下がってくる位が関の山で、親しくお話しなど交わすようなことは全然ございませんでした。ただキリスト教社会事業の会などの折には集りも小さいグループに限られますので、その様な会の時には先生のお席近くに連らなる事も出来るのでお話しなどもよく伺えるものでした。之は終戦直後、キリスト教社会事業の集りの時でした。会場は焼け残った都庁の荒れはてた一室でした。当日は日本フレンド奉仕団のミスター・バットが日本に再び来られて日本の社会事業のために御協力下さるお話しなどあつた時のことです。先生はミスター・バットの歓迎の辞を述べられました、ミスター・バットの昔に変わらぬ友情、キリスト教精神による愛情に感激されて、老の目に涙をうるませてなどという形容どころか嗚咽と共に大粒の涙が先生の頬にサンサンと流れ落ちていました。私は先生の純情さと熱情に接して学生時代に受けたあの何の感じもない

ような一本調子のお講義を通して感じた先生の反面にこうした面のあるのを知つて何か親しみと人間味を感じました。

先生は晩年まで非常にはつきりしていられてまして会合で演説なさるような時には若い者が到底かなわぬ位の大声でとうとうと演説をなさり内容も理路整然として八十何才の老令の方と思えぬ程でした。けれども或る曇つた日の会の後で一つの事件が起りました。その時先生は一と足先に自動車で送られてお帰りになつた後でした。参会者が控室にレーン・コートや傘を置いて置いたのですが一人の人の上等なレーン・コートと傘が失くなつたといふのです。さあ盗人が入つたのだと大騒ぎになりました。けれどもどうでしょう。そこには古ぼけたレーン・コートが一つ残り誰も取りにくる人がないのです。世話役の人が一体誰のかと検べると先生のものです。一同は確かに先生のお帰りの時にはレーン・コートも着られ、傘も持つて帰られた筈だからということになり、さては間違えられたかと早速お届けに伺うと、「ああそうか間違えたか」と全く無感動なお言葉で「それは気の毒であつた」とも何とも云われなかつたという様な話をきいたり見たりして、やつぱりお年は争

えないものだあと感じたことがありました。これをもつて先生の思い出の記と致します。

27 回 生

植 山 つ る

(厚生省児童局企画課)

焼野の原の一角に残つたボロボロの社会事業会館の中で何年ぶりかにお会いした生江先生は「生きていてよかつたね」と私の手を堅く握つて下さつた温さがいまま私の手に残っています。そしてこの時の感激が児童福祉制定の拍車となつて、草案会合にはいつも熱情ある大きな御声で協力して下さつたことは児童問題の最後の御活躍であつたように思われます。

其後あの御老体にも拘りませず、中央児童福祉審議会には欠席皆無という御出席で、昨年十一月八日の会合が最後となつて日本の児童福祉事業から忽然と姿を消されたのでした。

あの偉大な精神力と限りない慈愛のほとばしりに終始された故先生の永い生涯はいまま私の心の中に精進の努力目標として生きていくことを記して思い出の拙文といたします。

31 回 生

中 島 さ つ き

(東京都衛生局総務部普及課・医療社会事業班・東京都主事)

生江先生からあの部厚な「社会事業要綱」の本によつて、初めて社会事業の講義を伺つたのは昭和五年の春であつた。

少し前こごみの長身のスタイル、先生のお声はろうろうとして教室の隅まで響き、いつも変ることなく同じ態度で話された。今考えてみても同じお姿が想い浮ぶ。眼鏡の奥に静かな慈愛深い目があつた。

先生は感情をむき出しになさらない方であると思つていた。四年生の時の師走に近い或る日、社会事業部が廃されていよいよ三年の家政学部三類になるということを聞いて私達は騒ぎ出した。そして午後からの授業を学生大会を開くために預きたいと、社会科の教員室に頼みに行つた時先生は唯騒ぐだけではいけない。もつとはつさり方針を立ててするようにと、はげしく仰言つたことを覚えている、卒業して間もなく桜楓館で開かれた社会事業関係の集りに、先生は麻薬中毒者救護会の話を書き、薄団をいくつ作つてもすぐ中毒患者の為に破られて閉口していると言ふような

事を話され、誠実な実践者としての悩みを訴えられた。

二十年を経て米寿を祝う会に列席したが、その風貌は年をとられても余りお変わりにならないで、両眼から涙をぼろぼろこぼされながら貴重な御体験をお話しになり、先生によつて救われた一韓国人が涙にむせびながら感謝の言葉を述べていた光景は私の胸に深い感銘を与えている。

33 回 生

赤 桐 咲 子

(大阪社会事業短期大学・専攻科在学中)

あまり古い事で生江先生の思い出と申しましてでも特にごさいませぬけれど、温情あふれたよいおちい様と言う感じのお顔やお姿が今でも目に浮かびます。そして少し震えを帯びた力強いお声も耳にこびりついて居ります。

度重なつた不幸のあと福祉事業に打ちこみたいと再び学生になつた今、何の心配もなかつた目白の学生時代を思い夢の様でございませぬ。慾もなく勉強の足りなかつた若い頃が今更反省される毎日でございませぬ。

33 回 生

佐 藤 弥 寿 子

(東京芸大音楽部教官助手・東京芸大音楽部主事)

私共(三類一回生)の頃は生江先生も壮年時代の一番御元氣な時代だつたと思ひます。講義の時いつも遠くを見つめて少しのどにかかつた様な澄んだ声で講義をなさりその御声は今だに私の耳に残つて居ります。非常にき

帖面な方で時間は遅れていらつしやる様な事はありませんでした。卒業論文を指導して頂き色々の資料や相談に乗つて下さり、提出後大変に御はめを頂き嬉しかつた事を憶えています。強度の近視で肩を上げ氣味にして歩かれる先生は一寸近寄り難い印象を最初に受けましたが、色々と御指導を頂いてから、先生の人格にふれ温かい人間味と社会事業に対しては先生程造詣の深い方は無いのではあるまいかと非常に尊敬致したものでした。甚だまとまりませんが御返事と致します。

36 回 生

飯 尾 絢 子

(主婦)

十年一昔と申しますが、己に二昔も前にな

ります。当時新館の階段教室で二十数人のクラスで、先生は大層温容で常に学生を信頼して下さいました。御講義はノートをしなくてもよく、和気あいあいの空気を醸して居りました。やや左斜に向つて椅子に掛けられ、御高船とは思われない朗々とした大きな声で、特にニュージーランドの社会福祉施設の行届いた制度や、これに反し、我国の水準の低い事を慨嘆されていられた面影が、昨日の如く懐しく蘇つて参り、そぞろ心をうたれます。

37 回 生

池田 きみ枝

(板橋労働基準監督署次長)
第 一 課 長

生江先生のお講義の時が一番前の席に座り乍らつゝ居眠りする程変化のない事と、先づお声の大きい事が印象的でした。でも、阿へん中毒のお話になると、日本と中国の関係で日本人が麻薬の密売をしている事を大変ふんがいされて眼に涙を浮かべ乍らお話をきつていた事等、先生のお話は真心から社会事業を愛していらした御様子が御講義の中に表われておつたと思いました。

39 回 生

坂 本 エミ

(三重県婦人児童課母子係)

先生の御講義は情熱そのもののお講義でいらつしやいました。『阿片は最もにくむべき人類の敵である。阿片の密輸こそ、断じて許すべきではないのである』と、眼には涙一杯あふれ、声ふるわせて、さながら世人に訴えるが如く、阿片の害毒のおそろしさを諄々とお講義下さつた先生のあの崇高なお姿は、今も尚、私の心に強く焼きついております。縁あつて社会事業のはじくれにたずさわらせて頂いている現在、なげ出したくなるようなケースにぶつかると、在りし日の先生のこのあふれるような人類愛に燃えたお姿を思い出して心の糧といたしております。

先生にお教えをいただいた幸せを感謝しつつ、心から先生の御冥福をお祈りいたしております。

松 本 武子

(社会福祉学科助教授)

毎年、生江先生は謝恩会に出席して下さい

て、必ずあの朗々たる御声で御話をして下さいました。ニコニコと何の邪気もなく私共を笑わせて話して下さいました先生の御顔を、その当時の方は思い出して下さると思います。

何回生の時でしたか、「人、友のために命を捧げる、これほど貴きものなし」というテーマで語つて下さつたときの先生を特に私は思い出します。そして、先生は真底、これに徹していらつしやつたのだと思ふのです。

火曜日というと、高橋誠一郎先生、佐藤寛二先生、綿貫哲雄先生、そして生江先生の御講義が前後して丁度重なつていました。午後三時の休み時間には、よく火鉢を囲んで研究室で先生方の話の花が咲きました。先生方もお互いに楽しそうに賑やかに話合つていられ、そしてこの先生方のお話をきく私共——故柴木、三浦先生と私——も楽しゅうございました。「私は学者ではない」と標ぼうされながら生江先生は、他の先生方と大声で四方山話を語り合われていた様子が目に浮びます。

アメリカから帰国して旬日、私は久しぶりにお目もじして御挨拶いたしました。よろこんで下さつて、共々、当学科の昔話を語り合い、今日の発展を先生とよろこび合つたときも私には忘れ得ない日の思い出の一つとな

りました。

御病氣になられてからお見舞に行つた時も卒業生の出世話になり、谷野さん、大平さん、という御発展の様子を申上げると、既に知つていらつしやるのですが、名前をあげてゆくことその事が、先生にはお楽しいのでした。私は、実は孫がおちいさまを楽しませる様な気持ちで語り合いました。——しつかりやつてくれ、とそのときも、あのときも仰せられた先生の御声を私は皆様にお伝えしたく思います。

前 田 栄

(社会福祉学科専任講師)

私が入学した頃、生江先生はずい分な御年でした。七十五才位には御なりでしたでしょう。教場では音吐朗々というのでしょいか、室中にひびく名調子でした。ニューヨーク、ロンドン等のスラム街をお歩きになつた時の見聞、ニュージランドで如何に社会事業が発達しているか、禁酒運動について、阿片窟の話、もう十五年も昔のことになるので切々にしか思い出させませんけれども、お声の調子

だけは今でも耳にひびいてきます。

教室では一年間しかお接しませんでした。が、その度、卒業式の謝恩会で、又、社会事業大会、その他社会事業関係の会合で更に度々お目にかかりました。先生は戦後の十年間に時々御病氣をなさり、卒業生や社会事業関係者が皆で拠金して御慰めした事も何回もありました。米寿の御祝ひも社会館で盛大に行われました。そういう際の先生の無邪氣な御喜びようは本当に気持ちの良いものでした。涙を流して喜んで人々の好意をお受入れになりました。丁ねいな御礼状と共に、毎年の御年賀状も先生の方からお欠かしにならないのです。

青山P.S.講堂での社会事業祭は先生の徳を慕う者は皆参集しました。葬儀の間中、先生程幸福な生涯を過された方はないだろうという感慨で一ぱいでした。先生は人を、社会を心から愛された方だと思ひます。

一番ヶ瀬 康子

(社会福祉学科専任講師)

先生の最後の授業が特に印象的だつた。そ

れは、先生が、阿片中毒者問題で中国におたちになる為、学校をおやめになる直前の授業(昭和十九年三月)だつた。先生は、「日本人が阿片の密輸入をやつてゐる。その為、中毒者がどんどんふえてきた。私は、この日本人の罪をどうしてもつぐなわなければならぬ。」と、強くおつしやりながら、涙を幾筋も幾筋も流された。私はこの時の感動を今でも忘れない。

研究室へ戻つてきて、私は機関誌の編集の仕事を受持つ事になり、その為、機関誌創刊号の巻頭に、先生の原稿をお願いすべく、七年ぶりにお目にかかつた。先生は、御自宅で、静かに余生を送つておられた。身体が思うにまかせぬから、口述を速記するようにとおつしやつて、私は三度、先生の下へ伺つた。昔と変らぬ、ろうろうとしたお声で、幾度か涙とともに話になつたのが、この機関誌創刊号の「社会事業講座担当二十五年間の想ひ出」という稿である。

この三度の訪問中に、先生は、私の個人的な問題をいろいろとお聞きになつた。特に私が、社会事業史に興味をもつてゐる旨おこたへした時の、先生のお喜びの御様子は、私を胸一ぱいにさせた。先生は、自分も歴史に興

味をもつていたとおつしやりながら、御自分がお書きになつた歴史に関する著作の事や、論文の事をいろいろお話になつた。そして、日本女子大の社会事業学部が、いかに日本の社会事業史上に意義ある存在であつたかを、くり返しくり返しのべられ、必ず最後に成瀬が生きていたら、今のようじやないと、おむすびになつた。

その後、三年間、先生のもとへ伺おう伺おうと思いつつ、遂忙しきにまぎれて、御無沙汰していたが、先生から毎年御年賀をいただき、その度に、何時も激励のお言葉が一言必ずかかれてあつた。又、先生は、私が書いた機関誌三号の「成瀬仁蔵氏の社会事業観」をお読みなつて、二、三の人に「このような研究をしてくれる人がいてうれし」とおつしやつたと伝えきいてゐる。

いろいろな意味で、今の私は、まだまだ先生の不肖の弟子である。しかし、精一ぱいに、先生が望んでいらつしやつたものを受けとめて、生き抜きたいと思つてゐる。

生江孝之先生の御生涯

慶応三年（一八六七年）仙台にて出生、仙台藩士、生江元善の次男。明治一九年（一八八六年）宮城県中学校を卒業。（二〇才）明治一九年（一八八六年）東京英和学校（今の青山学院）へ入学。（二〇才）明治二三年（一八九〇年）青山学院退学、宣教師ジョンズ師の通訳となる。（二四才）明治二六、留岡幸助氏と会う。伝道開始の目的で北海道川上（今の旭川市）に赴任。この時代に、留岡幸助氏と会う。（二七才）明治二九年（一八九六年）青山学院神学部に入學。在学中原胤昭氏の東京出獄人保護所を手伝う。（三〇才）明治三二年（一八九九年）青山学院神学部を卒業。青山教会の副牧師に任命さる。（三三才）明治三三年（一九〇〇年）渡米。種々の社会事業施設を見学し、三四年にはニューヨーク博愛学校（今の社会事業学校）講習会に出席した。（三四才）明治三七年（一九〇四年）英仏兩國の社会事業を視察した後帰国。神戸市奉公会、神戸市婦人奉公会の幹事として活躍。以後社会事業界の第一線に立つて活躍。（三八才）明治三八年（一九〇五年）羽田武三氏長女繁子氏と結婚。三男子を挙げらる。（三九才）明治四二年（一九〇九年）内務省嘱託。地方局慈善救済事業事務職に従事。（四三才）大正七年（一九一八年）日本女子大学校教授及び日本大学講師となる。（五二才）大正一二年（一九一七、一八）名著「社会事業綱要」を公刊。社会局嘱託を辞し、中央社会事業協会の事務を掌握する。（五七才）大正一三年（一九一四年）立正大学講師となる。（五八才）大正一四年（一九二五年）オーストラリア、ニュージーランドに視察旅行を行う。（五九才）昭和四年（一九二九年）中華民国を視察。（六三才）昭和六年（一九三二年）「日本基督教社会事業史」を公刊。（六五才）その後は皆様が御存知の通り、正に日本社会事業の中心として輝かしい御生涯を送りになりました。

昭和三年（一九五七年）逝去。わが国最初の社会事業葬が挙行さる。天皇陛下より祭料を賜わり、正六位勲四等を追贈。（九二才）

※生江先生の御生涯については、現在、「自敘伝」が編纂されつつありますので刊行され次第、いすれお報せいたします。